

## 最近思うこと

二〇一六年七月二十七日

バイブル・サービス

妹 尾 知 昭

皆さん、こんにちは。今日は前期最後のバイブル・サービスなので、何か良いことを話さなければと自分にプレッシャーをかけたのですが、プレッシャーばかりが先行して何も考えておりません。聖霊のお働きを信じ、ほとんど何も考えずにここに登壇するのが、最近の自分のやり方になっています。今回も何も考えてきていないので、何を話せばいいかと考えています。今日は、なぜか国語の教科書を持ってきています。

私が普段していることを考えてみまして、それが学生の教育にどうつながっていくのかを内省してみました。例えば、私の授業では書くことをよく勧めるといふか、強制するのですが、人間発達学科の「大学入門ゼミ」を取った方、特に、私の担当になった方は、たくさん書かせられるので困った、困ったと言っているようです。あるいは初等教育コースに入り二年生になった方も、私に「あのレポートを書け、このレポートを書け」と随分鍛えられているのではないかと思います。それでストレスを感じている方もいるかもしれません。しかし書くことに関して、私は決して学生をいじめようとしているわけではありません。むしろ、学生に生きる意味を考えてもらいたいと、考えています。一部の学生は、そんなことはないというような表情をしていますが、実は、生きる意味は何だろ

ということを考えてもらえたらと思っています。それは、格好良く言うと、クリエイティブライティングという言い方になると思います。それから、書くことによる癒しということがありまして、人間は書くことによって心が癒されていくという考え方があります。例えば、日記をつけるということがその典型的な例だと思うのですが、日記を普段からつけている人は、割と心や情緒が安定してくるとい話を聞いたことがあるのではないかと思います。

これは順天堂大学の小林弘幸先生という方が書いた、『ストレスが消える「しない」健康法』という題の本ですが、この方は情緒を安定させる本をいろいろと書いています。有名なのは『三行日記』です。毎日、一日に三行日記を書けば情緒が安定してくると提唱されています。一日に三行だけでは少ないのではないかと、思いかもしれませんが、私自身変わるかどうかやってみました。私は学生時代に毎日、日記を書いていました。日記を書いていると、面白くないことがあればそのことを日記に綴ることになりますし、楽しいことがあればその楽しいことを綴ることがあり、その当時は、かなり精神状態が安定していたと思います。今、安定していないというわけではありませんよ。

私は今年から三行日記を書き始めました。三年日記という三年分書ける分厚い日記帳が売っているので、「よし、三行日記で三年続けるぞ」と思いました。お恥ずかしながら三月か四月辺りで途絶えてしまいました。もうすぐ七月も終わり、八月になろうとしているのになかなか書けていません。日記帳を見るたびに、「あんな分厚いものを買ってしまった……」とっています。しかし、三行日記でも書いているときには頭の中が整理できるので、これは良いと思いました。

日記もそうですが、先ほど申しました書くことによる癒しということがあります。私がレポートや文章を指導するときには、学生にある種のお題を与えます。しかし、そのお題に関して調べ学習してもらいというわけではあり

ません。むしろ、そのことに對して調べ学習は期待してはいないのです。レポートを書くことを通して自分語りをしてもらうのです。また、それをしなければ字数は埋まらないと思います。ですから、その膨大な字数を埋めるために、学生の皆さんには自分語りをしてもらっています。自分のことを語っていくうちに、だんだんと心の中が整理されてくるという経験を持っている人がいるかもしれません。自分の心の中で、ある種の整理がつくことがあるのです。結果として、このレポートを書いて達成感があり、心がなぜか落ち着いた、という意見をもらうことがあります。それが書くことによる癒しなのかと考えているところがあります。私自身も卒業論文を、そういう観点で指導しています。

私のゼミの卒業論文は分厚いので、三、四年生はピーピー言っていると思います。昨年の卒業生は、だいたい原稿用紙で百五十枚くらい書いています。かなり分厚いものを書きます。これは強制するわけではありません。最初は、「全然書けません」と言うので、私は「書けるだけ書いて」と言うのですが、結果として出てくると、原稿用紙百五十枚くらいになっています。学生も「こんなに書けると思いませんでした」と言いながら、達成感を持って卒業していくので、これも書くことによる癒しの効用なのかと考えている次第です。

書くことによる癒しは、一過性のものもありますが、できればそのまま一過性の癒しに終わらず、幸福感というものを持って社会に出て行ってほしいと思います。今の私の四年生のゼミ生に口を酸っぱくして言っていることがあります。それは、「君たちは将来、絶対に幸せになってね」ということです。不幸な人がいると言っているわけではありません。「卒業した後に学校に遊びにくることはかまわない。会いに来てくれるのはかまわないが、そのとき、皆さんがしなくてはならないのは、幸せになりましたという報告だけです。不幸になりましたという報告の場合は、絶対に来ないように」と言っています。すると、学生もなかなか意地悪で、「いいえ、不幸のお裾分けに

来ます」などと言っています。私はできるだけ幸せになっていただきたいと考えています。

さて、先日この本を読みました。内田樹という有名な方で、大学の先生をされていた方です。もう定年を迎え、現在は文筆活動などの場で活躍されています。この本では、クリエイティブライティングについて書いているという事なので、私も読んでみましたら、なかなか面白いことが書かれていました。夏目漱石は、東京帝国大学の英文学部で教授をしていたのですが、教授職を辞めて朝日新聞の社員になり、小説を書くようになったということは皆さんご存知の通りだと思います。当時、東京帝国大学の教授というのは、それこそ、今でもそうですが、同じ大学の先生でも格が高いと一般では思われているわけです。その地位を捨てて新聞記者になったのです。当時、新聞記者や小説家というのは、ずいぶん格が低いと思われていたそうです。今とはずいぶん違います。私も以前は不思議だと思いました。そのときの漱石の動機に関しては、いろいろな説があるのですが、内田先生は、このようなことをおっしゃっています。これは国文学や日本文学を専門とされている方からすると、それは違うのではないかと言われるかもしれませんが、私はそういう一面もあるのかなと思いますので、ご紹介いたします。

漱石という人は、東京帝国大学の英文学の教師でしたが、大学で英文学を講じていただけでは、もう間に合わないと思いつけると、学校を辞めて朝日新聞の社員になり『虞美人草』を書き始めます。明治の青年に向かって、人はいかに生きるべきかを物語的な迂回を通じてですが縷々説き聞かせました。

『虞美人草』というのは、通俗小説に見えますが驚くほど教訓的な物語です。文体は華麗な漢文調ですがストーリーは、けっこう単純です。甲野君、宗近君、小野君という三人の青年が出てきます。明治四十年代に帝国大学を

出た後、それぞれ自分たちが大学で身に付けた知識や技能をどう生かすかということを考えています。甲野君と小野君は、自分が受けた教育を自分のためだけに使おうとして、世の中のために使おうとは思いません。宗近君は、世の中のために自分の得た知識を使おうとしているお話だそうです。私が国語を教えているながら、「だそうです」と言うのは変ですが、かつて夏目漱石の本を読んだとき、まとめて読んでしまいましたので、頭の中がごちゃごちゃになっています。私は、大学院の博士課程のときに柴田勝二先生のゼミを取りました。柴田勝二先生は日本文学の世界では、かなり有名な方だと思うのですが、当時は柴田先生もまだお若くて、そんなにすごい先生だとは全然知らず、ただ単に単位のためだけにゼミを取らせてもらいました。そのときに先生から、「君は来週までに、この本と、この本を読んできてね」と言われたため、漱石を一通り読みました。急いで読んだということもあり、読んだはずなのですが、この本の内容はすっぱり忘れてしまっています。

今、本の原文を紹介しましたが、知識というのは得た後で、自分の立身出世のために使えるものは使ってもいいと思うのですが、やはり世のため人のために使うという観点は、重要なことになってくると改めて思いました。

私は普段、初等教育コースの学生さんを相手に、国語を教えるためにはどうするべきかということをお話しています。先日、三年生の学生は前期の教育実習から帰ってきたところですが、授業で模擬授業をしてから、現場に行き、教育実習生として、現場の体験をします。教育実習に行く時期から考えると、恐らく『走れ』という教材を使うと思ったので、対策的に授業で扱いました。『走れ』というのは、割と最近になって登場した作品です。ですから、皆さんが小学生の時には習っていないと思います。これはどういう話かというと、小学四年生の、のぶよさんという女の子が主人公です。あまり運動が得意ではないこともあり、運動会の朝、「ああ、私はこれから運動会に出るんだ。徒競走に出るんだ。そして、恐らく良い成績が残せないだろう」と少し落ち込んで浮かぬ顔をしてい

ます。ところが、弟のけんじ君は走るのが得意で、良い成績を残すことが分かっているのでウキウキしています。この作品は、実際に現場の先生方と話していても、四年生には難しいとの声を聞きます。最後は、のぶさんが活躍して良い成績を残して終わるのですが、この話はけっこう難しいと現場の先生は言われます。話自体は単純で、そんなに難しいものではないはずなのですが、なぜか難しいのです。なぜかというところ、この二人の子どもの家は母子家庭で、お母さんはものすごく苦勞をしているということが端々に出てきますが、そこまで読み取らせることが難しいのではないかとということで、現場の先生方は難しいと言います。主人公のぶよさんの気持ちを読み取らせるだけならできると思いますが、この子たちが置かれている母子家庭の状況や、お母さんがぎりぎりのところで頑張っていて、なおかつ、子どもに愛情を注ごうとしているところまで読み取らせようとするのは難しいと現場の先生方が苦慮されている教材の一つです。

模擬授業をしたときに、ある学生Aさんが、この教材は非常によく分かったと言いました。そのAさんは私のゼミ生ですが、貧困問題と教育について卒業研究を進めていて、今日も一限目で、その発表をしてくれました。貧困状態にある家庭の子どもの教育状況を見てみると、問題があるようです。例えば、家計状況が苦しいから習い事をさせることができないということもあります。かなり苦しい状況もあるということを、その学生は自分で本を読んで勉強していたということもあるのでしょう。そういうこともあり、この話は心にとっても染み込んできて、すごく大事な作品だということをAさん自身が言っていました。教育実習のときに、私も巡回指導に行きましたし、現場の先生からも「本当に良い学生さんですね。良い先生になってください」、とお世辞ではなく言われていましたし、私自身も良い先生になってくれるだろうと、とても期待をしています。そういうことも含めて考えていきますと、Aさんが教員になったときに、俗な言葉では、ハートを伝えていくことができると思っっています。Aさんの卒

業論文のテーマも「ハートを伝える国語教育」です。おそらくハートを伝えていく良い先生になってくれると思っています。そういうことも含めて良い教員養成とは、一体何だろうと思うわけです。頭が良いとか、知識があることはもちろん大切ですが、結局のところ人間性というものに帰着すると改めて思い至りました。人間性というものは、一朝一夕にできるものではありません。日頃の積み重ねや日頃の心がけ等がその人の人格を形成していき、そして、形成された人格を持って社会で活躍をしていくのだらうと思うのです。ということもあり、教師としては人格形成に資するようなことをしていかなければいけないと、私は考えています。学生の皆さんがそのように思って、専門の授業を頑張ろうと思ってくれるとありがたいです。ここには直接授業ではお会いしない人もいると思いますが、他にもそういった先生方がたくさんいらっしゃると思いますので、在学中にぜひ少しでも人格を向上させて、向上させてというのは少し傲慢な言い方かもしれませんが、社会に出て活躍をしてくれたらという、希望なのか何なのか分かりませんが、そのような内容をお話しさせていただきました。

(人間発達学科准教授)